

児童の様子

新年が明けて早くも1か月が経ちました。毎日子どもたちと楽しく過ごしていると時間が経つのがあっという間に感じてしまいます。1日1日を大切に過ごしていきたいと思います。

さて、今回は正月明けに行った書初めの活動の紹介をします(^▽^)/習字を習っている子は書き方の道具の使い方をよく知っていましたが、ほとんどの子は未経験だったので、1人1人支援員が関わりながら行いました♪「たつどし」「ひので」「かどまつ」など正月にまつわる言葉を一生懸命書く姿が見られ、道具の使い方や書き方などを、教え合う子どもたちの姿も(^▽^)/出来上がった作品は階段にしばらく飾ってました♪



筆で書くのは難しいな・・・

書き方教室に行ってるからしたことあるよ!



私は「かどまつ」って書こうかな♪



左手は紙を抑えながら書くといいよ!

本当だ! 書きやすい!



学校法人永原学園 さんこう 児童クラブ通信

令和6年2月発行
— 第11号 —

【三光幼稚園】

TEL: 0952-31-0753

【さんこう児童クラブ携帯】

TEL: 090-7430-1312

幼・保小接続期の姿から

佐賀市では、就学前の年長児と小学校1年生の交流が10年以上も続いていましたが、コロナ禍の4年間は対面での交流が叶わずにいました。

今年は久しぶりに連携校の神野小、若楠小との交流が復活し、25日に年長2組が神野小学校へ出かけてきました。三光の卒園児さんが喜んで声をかけてくれることは期待していましたが、さんこう児童クラブに通う1年生まで「Yせんせい〜!」と手を振って駆け寄ってくれ、心が温くなりました。

「年長さん達の案内を頼みましたよ!」と言うと、「だいじょうぶ!」と、自信満々に応えてくれました。はじめの言葉に始まり、学校クイズや教室探検などを通して、校内の様子やトイレの便器の違い等々、優しく教えてくれる1年生に大いに親しみを感じていた年長児たちでした。全ての1年生が文字の読み書きができるようになり、自分で書いたシナリオを相方と声を揃えて読んだり、通路の掲示板に並んだ作品の説明をしてくれたりする姿に、1年間の大きな成長を感じました。

♡2月のおたのしみ♡

○戶外活動 ○2月壁面製作

○バレンタイン製作 ○室内ゲーム

(フルーツバスケット等)

2月の学童児童数

	在籍者数	休所者数	利用者数	そのうち 新規 入所者数	1月末 退所者数
1年生	13	1	12	1	0
2年生	11	1	10	0	0
3年生	1	0	1	0	0
計	25	2	23	1	0

◇ 2月の目標 ◇

「みんなで話し合いながらルールを決めて遊ぶ」

子どもたちは戶外遊びが大好きで、よく鬼ごっこやドッジボールを楽しむ姿が見られています(^0^)/その遊びに詳しい子がルールを説明し、チームを決めてくれるのですが、その遊びをあまりその遊びをしたことがない子にとっては少し難しい時もあります。そこで、みんなが楽しんで遊ぶことができるようにみんなで話し合い、その日に参加するメンバーをみながらルールを考えていけるように関わっていききたいと思います。

「災害に備える心理学」

子ども学部心理カウンセリング学科 准教授 中園照美

令和6年1月1日、石川県能登地方を中心に大きな地震が発生し、甚大な被害が生じています。また、私たちが生活する佐賀においても毎年のように水害が生じています。今回のお便りでは、災害時に生じやすい心理状態やストレス反応についてお伝えします。

災害が起きた直後の心理的反応として、①「これくらいは普通だ」の心理（変わったことが起きても普通の範囲内と思いきみ、警報や避難指示の情報を軽視する）、②「自分だけは大丈夫」の心理（災害の恐れがあっても自分が被災するとは思わず）、③「前回大丈夫だったから」の心理（これまで警報が外れた経験をしていた場合、警報はあてにならないと考えやすくなる）、④「みんなと一緒に」の心理（「近所の人や避難しないから自分も避難しない」など周りの人の動きに同調しやすくなる）の4つの心理が生じやすくなります。このような心理が避難の遅れや被害の拡大につながってしまいます。また、緊急時には恐怖や焦りのため情報を処理できる範囲が狭くなり、情報の見落としや直感的に誤った判断をしてしまう状況も生じます。

次に災害後の心理的反応の長期的経過を説明します。被災直後は衝撃期とされ恐怖や無力感が生じ、一段落したところで、ハネムーン期と呼ばれる高揚感や連帯感を感じる時期に続きます。しかし、その後、厳しい現実と直面し、悲しみや怒りに圧倒される幻滅期に至り、長い幻滅期を経て、徐々に回復していきとされています。回復までにかかる時間は、被災の状況やもとの健康度、周囲のサポートなどで異なります。

被災後のストレス反応として、身体には動悸や息切れ・冷や汗・肩こり・腹痛・頭痛などが生じます。心理的には、恐怖や不安・イライラ・悲しみ・落ち込み・自責感や不信感が起こりやすくなります。さらに記憶にも影響が生じ、ショックな出来事を思い出せないということも起こります。このような反応には、まず落ち着くことが大切になりますので『吸う息よりも吐く息を長くする』を意識して身体の緊張を和らげるようにしましょう。

また、上記に挙げたストレス反応を、「異常な事態への正常な反応」ととらえることも大切です。普段の日常生活で動悸が続いたり不安が募ったりすることは何かの病気かと考えがちですが、災害時という状況においては当たり前の反応といえます。ただし、ストレス反応が一か月以上も続く場合は専門家に相談した方がよいといわれています。

私たちが今できることとしては、家屋の耐震化や家具の固定、水や食料などの備蓄があります。また周りの人が自分を支えてくれるという感覚も回復には重要とされていますので、日頃から身近な人との人間関係を大切にしておくことも意識できるといいですね。

万一の災害に備えて、今回の内容を頭の片隅に置いていただければと思います。